

# 「読書会」はいかなるゲームか —参加者へのインタビューを通して—

小牧 瞳<sup>1)</sup> 伊藤 晃一<sup>2)</sup>

千葉大学大学院教育学研究科修士課程<sup>1)</sup>

千葉大学大学院人文社会科学研究科博士後期課程<sup>2)</sup>

本稿は、千葉大学教育学部藤川研究室で12年にわたり継続されている「読書会」と呼ばれる活動についての報告である。本「読書会」では、哲学書等の難解な文献を参加者で一文ずつ解釈するとともに、担当者が次回の「読書会」までに、「読書会」の中で行われた議論を論文調にまとめる、「プロトコル」と呼ばれるものを作成する。藤川研究室では、この「プロトコル」作成という営みを大切にしてきた。

前半は、現在行なっている「読書会」の様子の記事し、「読書会」発足の経緯と、現在までの変遷をまとめた。後半は、本読書会と、世間一般に呼ばれている典型的な読書会と、大学等で一般的に行われている文献購読形式の演習との違いを、ゲーミフィケーションの知見を用いて比較検討した。他の読書会のゴールは文献を読み、議論することであるが、当「読書会」は「プロトコル」作成が一つのゴールと認知されており、それが参加者のモチベーションを支えている。

キーワード：読書会、「プロトコル」、ゲーミフィケーション、フィードバック、文献購読形式の演習

## 1. はじめに

千葉大学教育学部授業実践開発研究室（以下、藤川研究室とする）では、2006年度から2017年度現在に至るまで12年間にわたり「読書会」と呼ばれる活動が営まれている。

本稿は、この「読書会」という営みについての報告である。この「読書会」は一般的に世間で呼ばれている読書会とはその内容や方法が異なっている。そのため一般的な読書会と区別するため「読書会」と表記する。

それでは、この「読書会」なる営みは一体いかなる活動なのか。

本稿の前半、すなわち2章では、現在行なっている「読書会」の様子の記事をするとともに、「読書会」発足の経緯と、現在までの変遷をまとめる。

後半、すなわち3章以降では、当「読書会」と、世間一般に呼ばれている典型的な読書会や、大学等で行われている文献購読形式の演習との違いを、ゲーミフィケーションの知見を活かしながら比較検討し、その特徴を

明らかにする。

## 2. 藤川研究室における「読書会」とその変遷

### 2.1. 藤川研究室における現在の「読書会」

まず、2017年5月から始まり2018年3月現在も継続して行われている「読書会」について説明する。

読書する文献は、文化人類学者、山口昌男(2000)『文化と両義性』である。当文献は、今年度の「読書会」の主催者である筆者(小牧)が自身の研究テーマをより深めることを目的として指導教員である藤川大祐教授(以下、藤川とする)に提案し、了承されたものである。

参加者は、藤川と8名の学生である。参加者は、全て藤川研究室に所属しており、その内訳は、学部生1名、専攻生等2名、修士課程の学生3名、現職教員かつ博士課程の学生1名、博士課程の修了生(現在は大学院特別研究員)1名と、多種多様である。この学生たちは、当文献で「読書会」を行うことを事前に知った上で集った有志たちである。なお参加者は各自一冊この文献を準備し読書会に臨んでいる<sup>1)</sup>。

開催場所は、千葉大学教育学部の一室である。

当「読書会」は、参加者の予定に合わせてながら、基本的には週一回程度のペースで行われ、時間は一回につき1時間半程度行われる。

それでは、この「読書会」はどのように進められてい

Hitomi KOMAKI<sup>1)</sup>, Koichi ITO<sup>2)</sup>: What Kind of Game Do Participants Play in the "Book Club"? -Through the Analysis by the Interview to the Book Club Participants-  
1) Graduate School of Education, Chiba University  
2) Graduate School of Humanities and Social Sciences, Chiba University

るのだろうか。

「読書会」は大きく前半と後半の二つに分けられる。ただし初回の「読書会」では後述する後半部分の活動のみ行われる。

「読書会」の前半は、「プロトコル」と呼ばれるものの検討にあてられる。

ここでの「プロトコル」とは、文献の読解の中で行われる議論を録音し、担当者がその音声録音を基に文字起こしをし、それをあたかも一人で考えたかのように論文調にまとめた文章を指す<sup>2</sup>。議論された内容によるが、だいたい読書会一回の議論は、A4サイズの用紙5枚程度でまとめられる。

「プロトコル」の検討とは、「プロトコル」を書いてきた者が参加者に一人一部ずつ印刷された「プロトコル」を配布し、それを音読し、藤川をはじめ参加者全員でその内容を確認していく営みである。参加者は、何かその「プロトコル」について気がついたことがあれば、音読の途中でもそのことを指摘する。実際のところ、主にコメントを行うのは藤川であるが、他の参加者も自身の観点でコメントをしている。

コメントの内容は、誤字や脱字、主述のねじれ、引用ミス、論理の飛躍等の文章の構成の仕方への指摘や、実際の議論と異なっていたことが書かれていることへの指摘が多いが、「プロトコル」の内容に触発されて、さらに議論が進むこともある。

この「プロトコル」検討は、「プロトコル」がよく書けていれば約30分で終わる。ただし、あまりに検討する箇所が多いものについては、その検討に読書会のほとんどの時間、すなわち1時間強を費やすこともある。

「プロトコル」作成者は、毎回参加者による自主的な挙手により決定される。「プロトコル」を作成したい者が誰もいなかった場合は、主催者である筆者（小牧）が「プロトコル」作成をすることになっている。

「読書会」の後半は、文献を一文ずつ丹念に読み進める。具体的には、その回の「プロトコル」担当者が一文を読み上げ、それについて参加者が解釈をしていく。

基本的には藤川から「ここに書かれている〇〇はどういう意味？」とか「ここに書かれている「それ」は、本文のどこを指しているの？」などの問いかけがなされ、参加者がそれに答えることから解釈が始まる<sup>3</sup>。

ここで、実際に「読書会」でやりとりされている議論の一部を紹介したい<sup>4</sup>。

① 小牧：本文を読みます。「したがって「秩序」という言葉の中に「反秩序」という言葉が潜在的に含まれ、逆に「反秩序」の中に「秩序」が含意されている。」<sup>5</sup>

② 藤川：どういうことですか？含意というのは？

③ 小牧：含意は意味が含まれているという意味です。

④ 藤川：秩序という言葉の中に反秩序という言葉は含まれているの？

⑤ 博士課程の修了生：例えば、人を殺してはいけないというルールを作る時、潜在的に人を殺すと言う意味が含まれています。

⑥ 藤川：そうですね。何かをしてはいけないという秩序をつくるけど、何かをしてはいけないという反秩序が意味として入っている。人を殺すという概念がなければそういうルールは作られない。

このように、初めにその日の「プロトコル」を書く担当者が、①のように文献の中の一文を読み上げる。次に、②のように、藤川が「この言葉の意味は何？」「例を挙げて」などと問う。その問いに対し、参加者たちが③、⑤のように試行錯誤しながら答えていく。藤川は④、⑥のように、参加者の答えに何らかの応答をする。

このような仕方では、藤川と参加者は議論を重ね、文献を一文ずつ解釈していく。

それでは、このような議論は、どのように「プロトコル」に反映されるのだろうか。実際に書かれた「プロトコル」（小牧作成）を示そう<sup>6</sup>。

「したがって「秩序」という言葉の中に「反秩序」という言葉が潜在的に含まれ、逆に「反秩序」の中に「秩序」が含意されている。」を解釈する。分かりやすい例を挙げて解釈しよう。私たちは人を殺してはいけないというルールのもとに生活をしている。このルールには潜在的に人を殺すという意味が含まれている。なぜなら、そもそも人を殺すという概念自体が無い世界では、人を殺してはいけないというルールなど成立しないからである。

さて、現在の「読書会」の目的は二つある。一つは、藤川と学生が議論することを通して一冊の本を丹念に解釈することである。参加者はこの営みを通して、文献の内容の把握はもとより、その行間まで意識を巡らせて読むことになる。また、文献を参加者の研究テーマに引きつけて考えることになるので、結果として、一人で文献を読むより、はるかに具体的に、参加者各々の研究にとっても実りある解釈をすることが可能になる。

もう一つは「プロトコル」とよばれる文書の作成を通して、学生が将来論文を書く際に必要となる基礎的な知

識を養うことである。藤川研究室は、授業づくりについて研究する研究室であり、そこでは、授業という複雑な営みを、複雑なまま、つまり安易に解釈したり表層だけを見て解釈したりするのではなく、丁寧に言葉を重ねて記述しきることが重要視されている。「プロトコル」作成は、そのような力を養うのに有効である。

以上が現在行われている「読書会」の概要である。

## 2.2. 藤川研究室における「読書会」の変遷

それでは、そのような「読書会」がどのように発足し、どのように変遷してきたのかをみていこう。

「読書会」に該当する営みは2006年に発足した。ただし当時は「読書会」という名称では呼ばれていなかった。

これから示す「読書会」関連の情報の多くは、当時からの「読書会」(の前身)の参加者の言葉や、当時やり取りしていたメールのデータを基にしている。

### 2.2.1. 「読書会」の発足

2006年に現在の「読書会」の原型となるものが発足した。

それについては2人の学生による影響が大きい。当時、藤川研究室に所属していた修士課程2年生阿部学<sup>7</sup>と、研究室に出入りしていた学部4年生の筆者(伊藤)である。

当時阿部は、修士論文を書き進めるにあたって、自身の思索に哲学的な知見が必要なのではないかと考え、指導教員である藤川にどのような哲学書を何からどう読めばよいのか相談していた。

時を同じくして伊藤は、当時、東京大学教育学部で現象学的な知見に基づき、授業という営みを解明していた中田基昭教授(以下、中田とする)の著書<sup>8</sup>に感銘を受け、中田の授業を聴講していた<sup>9</sup>。伊藤は日頃からよく話す仲であった阿部とともに東京大学に週一回通ったり、現象学の文献の読解に挑戦しようとしていたりしていた。

藤川はこれらを受け、藤川自身が大学院生博士課程在籍中に参加していた「中田ゼミ」、すなわち中田が行っていた現象学の文献を講読する大学院のゼミと同じ形式の営みを「見よう見まね」<sup>10</sup>ではあるが、藤川研究室で開くことを提案した。

「中田ゼミ」は、次のような仕方で行われていたと藤川は振り返る。

- ① 課題となる哲学書の日本語訳を、原著と英語訳を参照しながら、参加者で一行ずつ丹念に解釈していく。
- ② そのやりとりを担当者(参加者で順番に回す)が録音し、次回までの課題として「プロトコ

ル」(1.1.を参照されたい)と呼ばれる文書を作成してくる。

- ③ 次のゼミで、担当者は「プロトコル」を発表し、中田をはじめ、参加者によるチェックを受ける。
- ④ その後、また参加者で文献の解釈をする。

この提案に、阿部、伊藤はもとより、藤川研究室に所属する他の大学院生も参加の意向を示し、自主ゼミとしての現象学の文献を読む会が始まった。

文献はジャン=ポール・サルトル『存在と無 現象学的存在論の試み I』<sup>11</sup>であった。これは阿部の研究テーマにそくして藤川が提案した文献である。この会は阿部によって、暫定的に「サルトルクラブ」と名付けられた。

「サルトルクラブ」は、基本的に「中田ゼミ」の手法を踏襲し行われたので、参加者はその仕方を藤川に教わりながら取り組んだ。

当時の参加者は、今まで経験したことのない文献の読み方に驚かされたと言う。たとえば「サルトルクラブ」の記念すべき第一回の1文目の解釈は次のように始まった。

以下は筆者(伊藤)による当時の回想である。

「現代思想は、存在するものを、それをあらわす現われの連鎖に、還元することによって、いちじらしい進歩をとげた。」(p.17)

一文を読み終わると、すかさず藤川が問う。

藤川 「現代思想」って何ですか。  
参加者一同 ……え？(沈黙)

また、初めて作成する「プロトコル」も当時の参加者にとっては新鮮で、刺激的なものだった。

阿部は、当時のことを振り返り、時間も経ち、何度かの「プロトコル」作成の思い出と混じって覚えている可能性があることから、それほどはっきりとは思い出せないとしながらも、「とにかく時間がかかったのを覚えている。2時間程度の議論を思い返したり、場合によっては録音を確認したり、ということは初めての経験で、見本もなく、苦勞した。他の大学院の授業などでは、簡潔なレジュメを書くことを求められる事が多く、「真逆」の読書だと感じた」と振り返っている<sup>12</sup>。

このように、東京大学の「中田ゼミ」を藤川が模して千葉大学ではじまったのが「サルトルクラブ」であり、この営みが、それから12年にわたり藤川研究室において続いてきた「読書会」の発端として位置付けられるのである。

### 2.2.2. 「読書会」の変遷

「サルトルクラブ」以降、阿部は博士課程に、伊藤は修士課程に進学した<sup>13</sup>。2人は、「サルトルクラブ」と同じような系式の読書会を継続したいと藤川に希望したため、文献を変えて読書会は継続されることとなった。

その後、当会は、参加者の要望や研究テーマに応じて、少しずつその形を変えていったが、基本は大学院レベルの学びの場として位置づけられた。

参加者は、基本的に大学院生の参加者だったため、2007年度から2013年度までは、この現象学の文献を読む一連の営みは、修士課程の授業に位置づけられることとなった<sup>14</sup>。しかし一方で、有志の大学生にも（単位にはならないが）ひらかれていた。この授業名は「授業づくりの諸問題 12（現象学文献講読による教育方法探究）」と名づけられた。

阿部、伊藤は、このような読書会とは別に、『存在と無 現象学的存在論の試み I』を「サルトルクラブ」と同じ仕方ですらに読み進めようと、自主的に集まり、「プロトコル」を書き、読み進めるなどもしていた。

なお、2008年度以降は、現象学の文献にこだわらず、受講者の研究テーマにそくした文献が当会のテーマとして扱われるようになっていった。

例えば、2010年度の前期には数学を勉強したいという要望が参加者からあり<sup>15</sup>、いったん哲学の文献を読み解き「プロトコル」を書く営みから離れ、「数理哲学研究会」と名づけられた数学の問題集を参加者全員で解く勉強会がひらかれた。課題図書は『教師のための問題集』<sup>16</sup>であった。

参加者は事前に数学の問題を解いてくる。そして藤川が問題を解けた人がいるか確認する。解けた参加者がいた場合はその参加者に解法を發表してもらい、解法と答えが妥当かを検討する。解けた者がいない場合は藤川が解法を提示するというような流れになった<sup>17</sup>。

その後再び、哲学書を解釈し「プロトコル」を書く営みが復活するが、2011年以降、会の進め方に大きな変更があった。

2011年前半の購読文献はアメリカの哲学者ドナルド・A・ショーンの『省察的实践とは何か ―プロフェッショナルの行為と思考―』の訳書<sup>18</sup>であった。この文献の解釈に置いて、従来行われていた方法、すなわち、文献を一文ずつ丹念に解釈し、担当者が「プロトコル」を書く営みは変更されることになった。理由としては、当時参加者たちが文献を一文ずつ丹念に解釈することよりも、文献を読み進めることのほうが妥当であると考えたためである。

そのため担当者が事前に要旨をまとめ、コメントを作成し、それを基に議論するというような形式が採られる

ことになった。そして、この形式は2013年度まで続いた。なお、当会が「読書会」と呼ばれるようになったのは、この頃からである。

また同年、それまで大学院レベルの学びの場として設定されていた当会は、1年限りの措置として大学1年生を対象に行われる「新入生セミナー」の中でも行われた。参加者はデューイによる『学校と社会』<sup>19</sup>を読むことになった。

2014年度から「読書会」は大学院、大学の授業という枠組みでは行われなくなった。その理由について藤川は次のように振り返っている<sup>20</sup>。

過去、単位にしたことがあったが、キツすぎて、学生が諦めて、成り立たなくなった。今は単位という縛りがなく、単位なくても、目的意識をもって参加する学生により、この難解な読書会が成り立っています。

このような流れを経て2014年度から2015年度にかけて、哲学書を「読書会」発足当初の仕方でも読む営みが、再度復活する。文献はウィトゲンシュタインの『哲学探究』<sup>21</sup>である。参加者は、原典“*Philosophische Untersuchungen*”<sup>22</sup>や英語訳の“*Philosophical Investigations*”<sup>23</sup>を参照しながら、文献の解釈を試みた。また「プロトコル」の作成も再開された。ただし「プロトコル」作成は毎回ではなく、時たまであった。

2016年前半には、再び、ドナルド・A・ショーンによる『省察的实践とは何か』を再び読むこととなった<sup>24</sup>。ここでは「プロトコル」は作成せず、初めてGoogleドキュメント<sup>25</sup>に議論の内容を書き込んでいく形式をとった。

2016年度後半はバーナード・スーツによる『ギリギリの哲学-ゲームプレイと理想の人生-』<sup>26</sup>を文献とし、「プロトコル」を書かない形式での「読書会」を行った。

そして今年2017年5月からは山口昌男による『文化と両義性』を文献に、「プロトコル」を書く「読書会」を行うこととなった。筆者（小牧）が過去の「読書会」参加者から「プロトコル」作成をする意義を聞いたためである。

以上が読書会の大きな経緯である。「読書会」が始まった2006年度から現在2018年度までの「読書会」の呼び名、文献タイトル、「プロトコル」の有無等をまとめると表1のようになる。「読書会」では、原典と訳書を見比べながら読み進めてきた。そのため表1の文献タイトルの列には原典、訳書を示した。

表1 「読書会」の変遷 (2006年度～2017年度)

年度	呼び名	『文献名』(原典)“原典名”	備考
2006	・哲学 ・通称:サルトル クラブ	『存在と無 現象学的存在論の試み I』(ジャン=ポール・サルトル) “L'ETRE ET LE NEANT”	・「プロトコル」あり
2007 前半	・授業づくりの諸 問題 12 (現象学 文献講読による 教育方法探究) ・通称:水7	『我と汝・対話』 <sup>27</sup> (マルティン・ブーバー) “ICH UND DU / ZWIESPRACHE”	・大学院の授業である ・「プロトコル」あり
2007 後半	・水7	『知覚の現象学』 <sup>28</sup> (メルロー=ポンティ) “PHENOMENOLOGIE DE LA PERCEPTION”	・大学院の授業である ・「プロトコル」あり
2008	・自主ゼミ	『思考と言語』 <sup>29</sup> (ヴィゴツキー) “Мышление и Речь” (原典) “Thought and Language” (英訳)	・大学院の授業は非開講 ・「プロトコル」なし
2009 前半	・水7	『有限責任会社』 <sup>30</sup> (デリダ) “LIMITED INC”	「プロトコル」あり
2009 後半	・自主ゼミ ・哲学ゼミ	『哲学探究』 <sup>31</sup> (ウィトゲンシュタイン) “Philosophische Untersuchungen” (原典) “Philosophical Investigations” (英訳)	・「プロトコル」なし
2010 前半	・数理哲学研究会 ・数理哲学ゼミ	『教師のための問題集』(島田茂)	・「プロトコル」なし ・事前に問題演習を解く
2010 後半	・水7	『存在と時間』 <sup>32</sup> (ハイデッカー) “Sein und Zeit” (原典) “Being and Time” (英訳)	・「プロトコル」あり
2011 前半	・読書会	『省察的实践とは何か—プロフェッショナルの行為と思考—』 (ドナルド=ショーン) “The Reflective Practitioner”	・「プロトコル」なし ・代わりに要約とコメントあり
	・新入生セミナー	『学校と社会』(ジョン・デューイ) “The School and Society”	・新入生向けの授業である ・「プロトコル」あり
2011 後半	・読書会	『拡張による学習』 <sup>33</sup> (エンゲストローム) “Learning by Expanding: An Activity-theoretical Approach”	・「プロトコル」なし ・代わりに要約とコメントあり
2012 前半	・ワーチ研究会 (読書会)	『心の声—媒介された行為への社会文化的アプローチ』 <sup>34</sup> (ワーチ) “Voices of the Mind: Sociocultural Approach to Mediated Action”	・「プロトコル」なし
2012 後半	・読書会	“Reality Is Broken: Why Games Make Us Better and How They Can Change the World” (Jane McGonigal)	・「プロトコル」なし ・英語の文献を読むことが目的である
2013	・読書会	『反転する福祉国家—オランダモデルの光と影』 <sup>35</sup> (水島治郎)	・時たま「プロトコル」あり
2014～ 2015	・読書会	『哲学探究』(ウィトゲンシュタイン) “Philosophische Untersuchungen” (原典) “Philosophical Investigations” (英訳)	・時たま「プロトコル」あり
2016 前半	・読書会	『省察的实践とは何か—プロフェッショナルの行為と思考—』 (ドナルド=ショーン) “The Reflective Practitioner”	・「プロトコル」なし ・Google ドキュメントでメモあり
2016 後半	・読書会	『ギリギリスの哲学』(バーナード・スーツ) “The Grasshopper: Games, Life and Utopia”	・「プロトコル」なし ・Google ドキュメントでメモあり
2017	・読書会	『文化と両義性』(山口昌男)	・「プロトコル」あり
2017年8 月	・読書会合宿	『思考と行動における言語』 <sup>36</sup> (S.I.ハヤカワ) “Language in Thought and Action”	・Google ドキュメントでメモあり

このように、藤川研究室は「読書会」という活動を、2006年度発足した「サルトルクラブ」以降、12年に渡り、その方法を少しずつ変えながらではあるが、一度も途切れさせることなく継続してきた。

授業という枠組みの中だけではなく、自主ゼミという形でも継続されてきた歴史を鑑みると、藤川研究室は、この「読書会」という営みを、大変大切にしてきたと言えるだろう。

### 3. 「読書会」は他の読書会とどう違うのか

#### 3.1. ゲーミフィケーションの援用

前章の「読書会」の変遷で確認してきたように、「読書会」は、その形式を、参加者の関心やその時々事情により変化させてきたが、この中でも、多くの参加者を刺激してきた営みは、「プロトコル」ありの「読書会」である。

「プロトコル」ありの「読書会」は、一般的に想起される典型的な読書会や、一般的に大学等で行われている文献購読形式の演習とは、様々な点で異なっている。

それでは、どのような点で異なるといえるのだろうか。

ここではその比較検討を行うにあたって、ゲーミフィケーションという概念を援用する。

ゲーミフィケーションとは、井上（2012）によれば「ゲームの考え方やデザイン・メカニクスなどの要素を、ゲーム以外の社会的な活動やサービスに利用するもの」（p.11）である。

素朴に考えれば、読書会全般をゲームと捉えている者は少ないだろう。しかし、おそらくどのような読書会にも、会が目指すゴール（目標）があり、そのゴールに到達するためのルール（規則、方法）があり、その営みを通して得られる何らかのフィードバック（利益、報酬）があるはずだ。そのように考えると、読書会もまた、一つのゲームとして記述できるのではないか。

特に、「プロトコル」ありの「読書会」のゴールや、ルールやフィードバックは、他の読書会のそれとは大きく異なるように思われるし、また、そのことが当「読書会」の大きな魅力であるようにも思われる。

以上の理由から、本稿では、ゲーミフィケーションを援用した、読書会の比較検討を行うこととする。

#### 3.2. 他の読書会との比較

藤川研究室における「読書会」と他の読書会はどのような点で異なるのか。本章では、それらがどのような目的で、またどのような形式で行われているのか整理する。

読書会は世の中で広く行われている。その分類の仕方は選書の仕方、運営の仕方など様々である。

吉田（2013）は日本における読書会を以下のように分類している（目次より）。

#### 多様な進め方—輪読会

- (1) 大学などで行われている典型的な輪読会
- (2) 吟味する輪読会
- (3) 役割担当を決めずにみんなが参加する輪読会

#### 多様な進め方—読書会

- (1) 既刊の書籍で紹介されている「読書会」と「ブッククラブ」
- (2) ネットを利用した全国読書会
- (3) レポーター形式
- (4) ワールドカフェ形式
- (5) 文学（リテラチャー）サークル
- (6) 互いのおすすめの本を紹介しあう形式
- (7) 長年にわたって行われている典型的な読書会

紙面の都合上全ての形式を取り上げることはできないため、3.3.で「(7) 長年にわたって行われている典型的な読書会」を取り上げ、3.4.で「(1) 大学などで行われている典型的な輪読会」を取り上げる。

3.4.では、実際に千葉大学教育学部で行われている授業を取り上げる。後述するが、この授業では、文献購読形式の演習が行われているのだが、その形式が上述の「輪読会」のそれと基本的に同じであると考えられるからである。また、輪読会という呼び名については、文献購読形式の演習と呼ぶことにする。

#### 3.3. 典型的な読書会

日本図書館情報学会用語辞典編集委員会（2013）は、読書会を「数人が定期的に集まって本などの感想を述べ合う会合。その場で同じ本を読む方法やあらかじめ読書をしていく方法、あるいは輪読、研究会などの方法がある。」（p.170）と説明している。これらのうち輪読とは、広辞苑によれば「数人が順番に一つの本を読み、解釈研究などをする事」（p.2819）である<sup>37</sup>。感想を述べ合う読書会と、文献の解釈研究に重きを置いた読書会があることがわかる。

また、渡邊（1983）は、読書会について「同じ目的を持った人たちが集まり向上発展を読書によって得ようとする会。」（p.334）としている。例えば「思考力を養うため」や、「話しあいの過程の中での自分の生活の反省による新しい前進のため」、「読書の領域を広くし且つ深くするために」、個人ではなくグループをつくって読書をするのだという。

吉田は深川 (2006) が長年行われてきた典型的な読書会の進め方を紹介しているとし、その内容を以下のようまとめている<sup>38</sup>。

- ・月 1 冊のペースを読む。
- ・読む本はメンバーが順番に決める (中略)。
- ・当日の司会進行も、本を選んだ者が行う。
- ・メンバーは事前に本を読んで会に出席する。話し合う時間は約 2 時間とする。

読書会は戦前から続く長い歴史を持つが、現在も活発に行われている。多くの読書会の形式は、特定の文献を複数人が読み、読後の意見や感想を交換する形式である。その他にも、参加者がそれぞれ他者に進めたい文献を持ち寄り、紹介するという形式の読書会も存在する。

多くの読書会において参加者は、個人での読書ではなく他者との交流を通して文献を読むことに大きな意味を持っていることが伺えた。

### 3.4. 文献講読形式の演習

次に、千葉大学大学院教育学研究科で行われている文献講読形式の演習の授業を説明していこう。なお、この授業は筆者 (小牧) も受講している。

この授業の参加者は 15 名程度であり、その内訳は単位履修を目的とした大学院生と、その授業を開講している准教授のゼミに所属する学部生数名である。当授業は全 15 回で構成されており、1 回目のオリエンテーション以外は文献を基に議論する時間となっている。文献は教育哲学の書である。

授業の前半は、担当者が要約したレジュメを他の参加者が読む時間になっている。担当者は、オリエンテーションの際に 14 回分の担当全てが決定される。要約する分量は、一人一章分であることが多い。レジュメには、担当者が提起すべきだと考えた論点をあげるものが義務付けられている。その後、担当教員はその日に読む章の中で確認すべき言葉を共有したり、論点に関する助言を行ったりする。

授業の後半は、一班 4 人程度のグループに分かれて自由に議論をする。担当教員は、要約した担当者が挙げた論点や、各グループの人が予習で疑問に感じた点について議論するよう指示している。そして授業が終わる時間の数分前に議論をやめさせ、教授がホワイトボードに書いたまとめを解説し、授業は終了する。

この授業において重点的に行われる活動は、授業の後半に行われる議論である。参加者が疑問だと感じた点を提示し他の参加者がそれに答えたり、要約担当者が提示した論点について議論したりする。

### 3.5. 整理

それでは、ゲーミフィケーションを援用して、藤川研究室における「読書会」と文献講読形式の演習と典型的な読書会の整理をしよう。

マクゴニガルは、「すべてのゲームに共通する四つの特徴」として「ゴール」「ルール」「フィードバックシステム」「自発的な参加」を挙げている<sup>39</sup>。

「ゴール」は、「プレイヤーが達成すべき具体的な成果のこと」であり、「プレイヤーに目的意識を与えるもの」である (p.39)。

「ルール」は、「プレイヤーがゴールに達する上での制約をもたらすものである (p.39)。

「フィードバックシステム」は、「プレイヤーがどこまでゴールに近づいているかを示すもの」である。「フィードバックが常時示されることで、プレイヤーはゴールに必ず到達できるという気持ちを保ち、プレイしつづける意欲」を得ることができる (pp.39-40)。

「自発的な参加」は、「ゲームをプレイする誰もがそのゴール、ルール、フィードバックを理解したうえで、進んで受け入れること」を意味する (p.40)。

以上の枠組みから三つの読書会を整理すると表 2 のようになる。

表 2 三つの読書会の整理<sup>40</sup>

	当「読書会」	文献講読形式の演習	典型的な読書会
ゴール	<ul style="list-style-type: none"> <li>・一人では理解しにくい文献を、集団で丁寧に解釈することを通してその内容を理解すること</li> <li>・論文を書く力を身につけること</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・文献を一冊読み切り、深く内容を理解すること</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・複数の参加者が意見や感想を述べ合い、向上発展を読書によって得る。</li> </ul>
ルール	<ul style="list-style-type: none"> <li>・一文ずつ解釈をしながら読み進める</li> <li>・「プロトコル」担当者は司会をし、後日「プロトコル」を作成する</li> <li>・担当は挙手制で決められる</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・要約担当者は一章分の内容を要約したレジュメを作成し、授業前半で発表する</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・決められた日に集まる</li> <li>・意見や感想を交換する</li> <li>・担当者は読む本を決定する</li> </ul>

	当「読書会」	文献購読形式の演習	典型的な読書会
フィードバックシステム	・指導者や参加者による各参加者の読み書き能力に関する指摘がなされる	・残りの章の数(残りの授業回数) ・参加者の議論を踏まえた上でなされる授業者によるまとめを聞く	・参加者同士の議論の中で、自身とは異なる意見や感想を知る
自発的な参加	・読書会に参加する点で自発的な参加といえる ・「プロトコル」作成も自発的な参加によって継続される	・授業を選択した点において自発的といえる	・自主的な活動であるため、参加者は自発的な参加をしていると考えられる

このように整理すると、藤川研究室における「読書会」は他の読書会と比べて特殊な点があると考えられる。ゴール、ルール、フィードバック、自発的な参加をそれぞれ検討していこう。

まず、ゴールを見てみよう。当「読書会」は文献を読み切ることをゴールとして掲げていない。参加者によって目指されるゴールが違うために、学習者の具体的な行動が違い、同様に学習者が習得するものも違う。4章において詳しく述べるが、参加者は同じ「読書会」に参加しているものの、各々がプレイする「ゲーム」は異なる。そのため、文献を読み切ることがゴールではなく、一人では理解しにくい文献を、集団で丁寧に解釈することを通してその内容を理解することが当「読書会」のゴールではあるが、参加者によって目指されるゴールは必ずしも一致しないことには留意されたい。

次に、ルールを見てみよう。「プロトコル」作成という営みが繰り返されているのは特異な点だろう。一体「プロトコル」作成とは、「読書会」の中でどのような意味を持つのだろうか。他の読書会において参加者は、事前に予習するべき部分を読み、集まって話すという営みを繰り返す。一方で、当「読書会」は、議論の事後に担当者が「プロトコル」を書き、次回の「読書会」にて検討を行うことを繰り返す。

「プロトコル」作成は、その担当者への負担が著しく大きいことが挙げられる。しかしその結果、「プロトコル」作成者は、自身が将来論文を書く際に必要となる基礎知識を養ったり、鍛えたりすることができる。また、正しい文法知識を学ぶことにとどまらず、修士論文など長い論文を書く際に最後まで文法の間違いをしないように注意しながら書き続けることができる力、いわば知

的体力とも言える力をつけることもできる。

「プロトコル」作成者が、参加者の挙手制で決まるところも特異な点だろう。自らの力を鍛えるためには、自発的にそこに飛び込んで努力するしかない、という、大変シンプルな、しかしそれゆえにある参加者にとっては過酷なゲームになっているのだと考えられる。

次に、フィードバックシステムを見てみよう。文献の解釈や「プロトコル」作成から、参加者それぞれの読み書き能力が他の参加者と共有される。「読書会」では難解な文献を扱っているため、時たま全く文意を読み取れないことがある。そうした時に、ある参加者が思考を巡らせて発言し、他の参加者から適切であるかどうか、それは近いようだけれども違うといった反応がすぐなされる。これは読み能力に対するフィードバックシステムといえるだろう。

「プロトコル」検討では「プロトコル」作成者に対して一つ一つ細かい指摘がなされる。「プロトコル」作成は、大きな労力を必要とする代わりに、「プロトコル」検討において、大きなリターンも返ってくるのである。逆に言えば、中途半端に「プロトコル」を仕上げた者は、中途半端なリターンしか返ってこないで、やったところで大した意味はないことになってしまう。

最後に、自発的な参加を見てみよう。何が参加者にとって自発的な参加を維持する同期になっているのだろうか。それは、文献に対する一人一人の解釈する能力が問われていることだと考えられる。例えば、参加者の執筆する卒業論文や、修士論文、博士論文に引きつけて、文献の内容を解釈することがある。また、異なる文化背景を持った者同士が集まることで、文献に書かれた内容の解釈が異なることもある。意見の交換にとどまらず、一文一文を多様な解釈に基づいて読み進めることも特殊な点であろう。

つまり、「読書会」を一つのゲームとして考えると、「プロトコル」検討の中で大きなリターンを得るための、「プロトコル」作成ゲームなるものが存在し、そこで参加者は自らの論文を書く力を鍛えることができるのである。さらに、一人ひとりの文献に対する解釈が、一人ではなしえないような深い読解につながるものが、「読書会」に参加する動機につながるとも考えられる。

#### 4. 「読書会」参加者へのインタビュー

##### 4.1. 参加者へのインタビューをする目的

それでは、「読書会」の参加者は、一体どのような思いで、「読書会」に参加しているのか、インタビューを通して考察していこう。

本章では「読書会」に参加している学生へのインタビューを通して、参加者、すなわち「読書会」というゲー

ムのゲームプレイヤーが、一体どのようなゲームとして「読書会」を捉えているかを明らかにする。

その際、「読書会」参加者が、「読書会」を、どのように他と比較しているのか明らかにするために、4.2.で示した文献講読形式の演習への参加の有無も合わせてインタビューした

表3に示した参加者にインタビューを試みた。

質問の内容は、主に「プロトコル」についてどう考えているかという点と、読書会のゴールをどのように考えているかに重きをおいた。

表3 インタビューを試みた参加者一覧

名前 (仮称)	「読書会」への参加の有無	文献講読形式の演習への参加の有無
K	○	○
A	○	○
J	○	
S	○	

#### 4.2. インタビューの記述について

本章におけるインタビューの内容は、録音を基に記述したものである。インタビューはいずれも藤川研究室で行った。

以下、記述の中で「―」は筆者の質問、それ以外は回答者の答えである。必要に応じて ( ) で捕捉をする。

##### 4.2.1. Kへのインタビュー

Kは藤川研究室に所属する修士課程1年生である。学部生の時には別の大学に所属していたが、2016年度のKが4年生の時から読書会には参加している。「読書会」では筆者(小牧)と同じ頻度で「プロトコル」を担当している。Kは筆者と同じく文献講読形式の演習に参加している。その文献講読を行う授業についても聞き取りを行った。

―「読書会」で「プロトコル」を書くことについてどう考えていますか？

K: 昔は義務感が強かった。でも今は、自分のためにどうなっているかも分かっているし、意欲的になっている。心境の変化があったんだと思う。最初は、場からの義務感、参加者として感じている義務感とか。立場も修士1年だし。学部だったら感じなかったかも。後期入ってから自分のためになっている感じがした。夏にたくさん読んだことよって、無茶したから、今の読書量だったら頑張れる。2時間に比べたら。

Kの言う「場からの義務感」とは、「読書会」で筆者

が「誰か「プロトコル」を書きたい人はいますか？」という問いかけに対し、誰も書きたい意向を示さない時に、K自身が感じる義務感である。自分がやらなければならないと感じるそうだ。沈黙の時間のあと、Kが手を挙げるのが度々ある。

また、2017年度の夏には4時間～5時間に及ぶ読書会を行った。さらに、『思考と行動における言語』を文献に読書会合宿を開催した。二日間で11時間検討した。その時の読書量に比べると、週に一回60分間程度の読書会はできると感じるのだろう。

―「読書会」のゴールは何だと思いますか？

K: ゴールは、「プロトコル」書くこと、文章をきちんと書けるようになることがゴール。今のところはまだできていないけど。前回とか、前々回とか、ガチで臨んでいる時もある。そういう時に、ちゃんと手応えを掴んで他の人にも認められるようになること。

―文献講読形式の演習のゴールは？

K: みんなと同じ共通認識を持つことがゴールだと思っている。

Kは、二つの読書会のゴールについて異なるゴールを感じている。「読書会」のゴールは「プロトコル」を書けるようになることであり、文献講読形式の演習のゴールは他の授業履修者と同等の理解をすることである。

また他の興味深い発言として、「はまっているかもしれない」という発言があった。Kにモチベーションはどこにあるのか問うと、Kは「ソシャゲ(ソーシャルゲーム)とかでイベントがあると走るんだよね。報酬があるから。読書会もおんなじで、報酬がある。」と述べていた。Kのいう「報酬」とは、自身が作成した「プロトコル」に対して他の参加者からなされる指摘や評価だと考えられる。プロトコルを作成した者は、文法としての間違いや議論の実際と文章の違いなどを細かく指摘されたり、前回より文章が上達しているといった評価をされたりする。そして、その指摘や評価が「プロトコル」の作成のモチベーションにつながっていると考える。K自身が「報酬」を感じられることが、単位が与えられないにも関わらず「読書会」に参加し続け、「プロトコル」を何度も作成できる理由の一つだろう。

##### 4.2.2. Aへのインタビュー

Aは藤川研究室に所属する学部3年生である。今年度の「読書会」が初めての参加である。「読書会」参加者の中では最年少である。「プロトコル」は二度経験したことがある。Aは筆者らが受けている2.1.の授業と似

た授業を受けている。その文献講読を行う授業についても聞き取りを行った。

—「読書会」で「プロトコル」を書くことについてどう考えていますか？

A: やったときにはまとめるのが大変です。どう文字にしようって。小牧さん（筆者）の文章を真似したりして、文章の作り方とか言い回しは自分でやると書けるなという感じです。文章は書かないと書けないなという。

—「読書会」のゴールは何だと思えますか？

A: 読書会で読む本は今まで読んだこと無いもので、先生とか小牧さんの話を聞いて、今まで知らなかったことを知る機会になっています。その場にいてだけで学べることがあります。参加することに意味があると思えます。

—文献講読形式の演習のゴールは何だと思えますか？

A: 最終課題がレポート形式でも良いけど、それにこだわらずに何でもいいという感じです。感想でも何でも。

Aは「読書会」のゴールを「今まで知らなかったことを知る」こととしている。一方、Aは文献講読形式の演習のゴールをレポートだとしている。Aが受けている文献講読形式の演習では、授業の最終課題として文献に関するレポートが課される。単位が付与される授業となると、参加者の意識はレポートの提出にも重きを置かれることが伺える。

#### 4.2.3. Jへのインタビュー

Jは藤川研究室に所属する専攻生である。来年度から大学院1年になる予定である。Jの母語はマダガスカル語、第二外国語はフランス語である。また、Jは「プロトコル」を一度書いた経験がある。

—この前初めて「プロトコル」書いてもらいましたが、やってみてどうでしたか？思っていたよりも簡単だったとか、難しかったとか。

J: 「プロトコル」を書くのは難しかったですが、とても勉強になりました。

—難しかったとしたら、どの辺が難しかったですか？

J: 文字起こしが一番難しかったです。まとめるのもそんなに出来ませんでした。

Jは、録音された音声を日本語にする段階で苦戦したようである。Jが作成した「プロトコル」は二回に渡って検討された。一回目の検討の際に漢字の書き間違いや、議論の文字起こしの部分で間違いがあったためである。そのため、一回目の検討後、筆者（小牧）がサポートに入り二回目の「プロトコル」検討をする運びとなった。

—読書会参加していて、はじめと今で違うことはありますか？

J: 私にとっては日本語のレベルが伸びたと思います。最初は何の話だか分かりませんでした。でも今は色々な専門的な言葉が少しずつ分かって来ました。それに、日本語だけではなく、一般的な知識も高まったと思います。（例えば、）考え方、文化、歴史、理論などです。

—読書会のゴール、つまり自分が達成すべき具体的な成果のことは何だと思えますか？

J: 私にとってのゴールは次の四つの点です。

- 1—日本の歴史、文化について学ぶこと。
- 2—自分の意見を言えるようになり、ディスカッションが出来るようになること。
- 3—「プロトコル」書きを通して、論文を書けるようになること。
- 4—様々の解釈を踏まえ、自分の知識を高めること。

Jは日本語を学ぶための授業を他に履修しているが、日本語で論文を書くための学びは当「読書会」以外では無いという。日常会話ではなく論文を書くための日本語を学ぶ場としても「読書会」が機能していると考えられる。

また留学生の存在は、他の参加者にとってもありがたいものである。現在読んでいる『文化と両義性』の主な内容が日本の文化や世界の民俗を扱いつつ、文化における記号論を検討することである。内容を深く解釈する中で、西欧の文化を知る留学生がいることは有意義なものであった。「読書会」参加者の知の幅が広いほど、内容を深く理解できることが伺えた。

#### 4.2.4. Sへのインタビュー

Sは藤川研究室に所属する大学院1年生である。Sの母語はタイ語であるが、Sの日本語能力は日本語母語話者とさほど変わらない。「プロトコル」は一度経験したことがある。

—この前初めて「プロトコル」書いてもらいました

が、やってみてどうでしたか？

**K:** 難しかった。難しかったのは私の録音した音声聞きづらかったから。(中略)あと、読書会している時はみんななんとなく何の事言ってるのかわかると思うけど、「プロトコル」やったら主語は何だろう、何のことに説明しているんだろうってなる時が結構ある。それと、これは私の勉強不足のせいなんだけど、どの漢字が正しいのかわからない時があるの。簡単な例だと「見る」「観る」とかがイメージつきやすいかな？ 読み方は一緒だけど漢字は違うっていうのが多いからなるべく気をつけるようにしている。

**S**は「プロトコル」を書く際に主語を明確にすることや適切な漢字を選ぶことについて難しさを感じているようだった。藤川は「プロトコル」の検討の際に、主語を略さないよう指摘する。日本語は英語と違って主語を曖昧にしやすい。しかし、「プロトコル」で文章にする際には主語を略すことは許されない。

—「読書会」のゴールは何だと思いますか？

短期的な目標は(中略)毎回の読書会で少なくとも一つは学んだことをメモすること。内容について一つ、日本語の単語について一つ、文法・表現について一つ。長期的な目標は考えてなかったけど、短期的な目標を達成して積み重ねていけば、論文を書くときに前より日本語がレベルアップしているといいなと思っている。

—「読書会」で「プロトコル」を書くことについてどう考えていますか？

**K:**「プロトコル」を書くのはいいと思います。本の内容の解釈の仕方だけでなく、日本語の勉強もこの時間に同時にできるので留学生である私にとっては一石二鳥だと思っています。読書会で話し合ったことが「プロトコル」の形に残るのもいいと思います。私が初めて「プロトコル」を書いた時は、他の人が書いた「プロトコル」を参考にしながら書いたので何とかできました。

**S**は「プロトコル」の作成が形に残る点を良さとして挙げている。他の読書会において議論の内容を全て文字に残すことは難しい。文字に残すことを目的とするのではなく、学生の論文指導の一つと位置づけることで可能になっているのだと考えられる。

## 5. ゲームとしての「読書会」

4章におけるインタビューからは、現在の「読書会」において、「プロトコル」を書くことが参加者の大きなモチベーションにつながっていることがうかがえた。

「プロトコル」の担当は順番制ではなく、挙手制である。順番制が、参加者の参加における平等性を担保する、いわば平等システムを採っているとすれば、「読書会」の参加者の参加におけるシステムは、不平等システムを採っていると言えよう。不平等であることは学びの場においてふさわしくないように感じられるかもしれない。

しかし実は不平等であるからこそ、「プロトコル」の担当者は自発的な参加をしていると感じ、大きなモチベーションをそこに感じるのではないだろうか。

「読書会」とは、その参加者が、「プロトコル」作成というシステムを通して自発的に参加するようになり、その結果、自らの論文を書く力を鍛えるというフィードバックシステムが有効に機能するゲームだといえる。ただし、「プロトコル」作成を行う「読書会」を行う際には、学生参加者を指導できる教員の存在が必須である。

本論文では、「読書会」の概要と歴史の変遷を示し、ゲーミフィケーションの知見を用いて他の読書会と比較検討を行った。また、現在の「読書会」に参加している者へのインタビューを通して、参加者の側から「読書会」がどのように捉えられているのかを明らかにした。

今後は、今回の報告を基に、なぜ当「読書会」が長年に渡って続けられてきたのかということや、「読書会」そのものの意義がどのように変遷してきたのかを明らかにし、教員養成あるいは教育研究者養成としての「読書会」の意義を見出していきたい。

<sup>1</sup> 募集については、研究室メーリングリストや、LINEグループでのアナウンスや、藤川による声かけなどによってなされた。

<sup>2</sup> 一般的に「プロトコル」とは、「逐語記録」などと訳されることが多いが、当「読書会」ではそのような意味では使用していないことに留意されたい。

「プロトコル」は他の意味で使用されることもある。例えば、「プロトコル」は演習記録と説明されている場合がある。東京大学文学部の授業において哲学演習を担当する高山守教授は、インタビューの中で「プロトコルは、前回の演習の分が、毎回演習のはじめに読み上げられるが、これによって、前回の繋がりがかなりの程度確認できて、当日の分に入りやすい。」(出典は次の段落に示す)と述べている。当「読書会」とプロトコル作成の目的は異なるが、「プロトコル」という言葉の使い方の根本では大差は無いように推測される。それゆえに、実際に行われている営みは近いのだと考えられる。

東京大学「第1期中期目標期間に係る業務の実績に関する報告書等」([https://www.u-tokyo.ac.jp/gen01/d05\\_04\\_j.html](https://www.u-tokyo.ac.jp/gen01/d05_04_j.html))における「中期目標期間に係る業務の実績に関する報告書等(平成16~19年度)」、「学部・研究科等の現況調査表(平成16~19年度)」学部・文学部、p.10-14

(<https://www.u-tokyo.ac.jp/content/400004271.pdf>)より(最終閲覧日2018年3月9日)

<sup>3</sup> 時々「どういう意味？」とか「はい。解釈して」というような、より抽象度の高い問いで議論が始まることもある。

<sup>4</sup> 2017年12月13日に行われた読書会中の会話記録である。

- 5 山口 (2000)、p.39
- 6 2017年8月25日に行われた読書会の内容について書かれた「プロトコル」。検討は、8月28日に行われた。
- 7 現・敬愛大学専任講師
- 8 中田 (1996)
- 9 伊藤は感銘のあまり、中田に手紙を出し、中田の厚意で講義の聴講が許されたという経緯がある。
- 10 藤川はそのように述べている。
- 11 ジャン=ポール・サルトル著/松浪信三郎訳 (2007)
- 12 筆者(伊藤)が、当時のことを阿部にメールにてインタビューし、そこでやりとりした文面を許可を得て引用した。
- 13 伊藤は、修士課程より藤川研究室に所属した。
- 14 2008年度は諸々の事情から非開講となった。
- 15 ちなみに言い出したのは、筆者(伊藤)である。当時伊藤は、中学校か高等学校の国語科の教員になる予定でいたが、ただの国語科教員ではなく「数学もできる国語教師」になりたいと考えていた。
- 16 島田 (1990)
- 17 実際に問題を解けた者はほぼいなかったことを小声で告白する。
- 18 柳沢昌一・三輪建二訳 (2007) (Schön (1983))
- 19 デューイ著/宮原誠一訳 (1957)
- 20 BIRDY 読書会チーム (2014)
- 21 ルートヴィヒ・ヴィトゲンシュタイン著/丘澤静也訳 (2013)
- 22 ドイツ語の原典である。Wittgenstein (2003)
- 23 Ludwig Wittgenstein 著/P. M. S. Hacker, Joachim Schulte 訳 (2009)
- 24 2016年度に行われた日本教育工学会全国大会のシンポジウムにて佐伯胖東京大学名誉教授がショーアの文献を読むべきだと話していたことに端を発する。
- 25 Google ドキュメントとは、Googleが開発したwebブラウザ上で利用できるアプリケーションである。web上に掲載されたファイルに、複数の人間が同時に書き込みでき、また閲覧できる。
- 26 Suits (1978) (川谷茂樹・山田貴裕訳 (2015))
- 27 マルティン・ブーバー著/田口義弘訳 (1978)
- 28 メルロー=ポインティ著/竹内芳郎・小木貞孝共訳 (1967)
- 29 ヴィゴツキー著/柴田義松訳 (2001)
- 30 ジャック・デリダ著/高橋哲哉・増田一夫・宮崎裕助訳 (2002)
- 31 ウィトゲンシュタイン著/藤本隆志訳 (1976)
- 32 ハイデガー著/原佑・渡邊二郎訳 (2003)
- 33 ユーリア・エンゲストローム著/山住勝広・松下佳代・百合草禎二・保坂裕子・庄井良信・手取義宏・高橋登訳 (1999)
- 34 ジェームス・ワーチ著/田島信元・佐藤公治・茂呂雄二・上村佳世子 (2004)
- 35 水島 (2012)
- 36 S.I.ハヤカワ著・大久保訳 (1985)
- 37 新村出編 (1998)
- 38 深川賢郎 (2006)『仲間と読み深める 読書会のすすめ』溪水社、pp.10-14
- 39 McGonigal (2011)  
本文の引用は次の訳書より行った。  
妹尾堅一郎監修 藤本徹・藤井清美訳『幸せな未来は「ゲーム」が創る』早川書房、2011年、pp.39-40
- 40 表2における「典型的な読書会」の記述は渡邊 (2011)を基に筆者が作成した。

#### 引用文献

- 井上明人 (2012)『ゲーミフィケーション <ゲーム>がビジネスを変える』NHK出版
- ウィトゲンシュタイン著/藤本隆志訳 (1976)『哲学探究』ウィトゲンシュタイン全集8 (全10巻) 第7回配本、大修館書店
- ヴィゴツキー著/柴田義松訳 (2001)『新約本・思考と言語』

- 新読書社
- 島田茂 (1990)『教師のための問題集』教職数学シリーズ 実践編10、共立出版
- ジェームス・ワーチ著/田島信元・佐藤公治・茂呂雄二・上村佳世子 (2004)『心の声—媒介された行為への社会文化的アプローチ』福村出版
- ジャック・デリダ著/高橋哲哉・増田一夫・宮崎裕助訳 (2002)『有限責任会社』法政大学出版局
- ジャン=ポール・サルトル著/松浪信三郎訳 (2007)『存在と無 現象学的存在論の試み I』筑摩書房
- 新村出編 (1998)『広辞苑 第五版』岩波書店
- デューイ著/宮原誠一訳 (1957)『学校と社会』岩波文庫
- 中田基昭 (1996)『教育の現象学—授業を育む子どもたち』川島書店
- 日本図書館情報学会用語辞典編集委員会 (2013)『図書館情報学用語辞典 第4版』丸善出版
- ハイデガー著/原佑・渡邊二郎訳 (2003)『存在と時間 I』中央公論新社
- S.I.ハヤカワ著・大久保忠利訳 (1985)『思考と行動における言語 原書第4版』岩波書店
- 深川賢郎 (2006)『仲間と読み深める 読書会のすすめ』溪水社
- マルティン・ブーバー著/田口義弘訳 (1978)『我と汝・対話』みすず書房
- 水島治郎 (2012)『反転する福祉国家—オランダモデルの光と影』岩波書店
- メルロー=ポインティ著/竹内芳郎・小木貞孝共訳 (1967)『知覚の現象学1』みすず書房
- 山口昌男 (2000)『文化と両義性』岩波現代文庫 学術16、岩波書店
- ユーリア・エンゲストローム著/山住勝広・松下佳代・百合草禎二・保坂裕子・庄井良信・手取義宏・高橋登訳 (1999)『拡張による学習—活動理論からのアプローチ』新曜社
- 吉田新一郎 (2013)『読書がさらに楽しくなるブッククラブ—読書会をより面白く、人とつながる学びの深さ』新評論
- ルートヴィヒ・ヴィトゲンシュタイン著/丘澤静也訳 (2013)『哲学探究』岩波書店
- 渡邊正玄 (1983)『図書・図書館用語集成』近畿大学印刷局
- BIRDY 読書会チーム (2014)【読書会取材レポート】千葉大 未来の教員たちによる「超実践型読書会」  
<https://bdy.jp/press/1756> (最終閲覧日 2018年3月4日)
- McGonigal, Jane (2011) “Reality Is Broken: Why Games Make us Better And How They Can Change The World”, Londres, Penguin Books. (妹尾堅一郎監修 藤本徹・藤井清美訳『幸せな未来は「ゲーム」が創る』早川書房、2011年)
- Schön, Donald A. (1983) “The Reflective Practitioner: How Professionals Think In Action”, Basic Books (柳沢昌一・三輪建二訳『省察的実践とは何か—プロフェッショナルの行為と思考』鳳書房、2007年)
- Suits, Bernard (1978) “The Grasshopper: Games, Life and Utopia”, reprinted by Broadview Press in 2005 (川谷茂樹・山田貴裕訳『ギリギリの哲学 ゲームプレイと理想の人生』ナカニシヤ出版、2015)
- Wittgenstein, Ludwig 著/P. M. S. Hacker, Joachim Schulte 訳 (2009) “Philosophical Investigations”, Wiley-Blackwell
- Wittgenstein, Ludwig (2003) “Philosophische Untersuchungen”, Bibliothek Suhrkamp